

私の手元に文庫本「オホーツク街道」があります。本書の終章で著者・司馬遼太郎は“私どもの血の中に、微量ながらも、北海の海獣狩人の血がまじっていることを知っただけで、豊かな思いをもった。旅の目的は、それだけでも果たせた。”と記述しています。

また「日本国は、大和民族だけで成立しているのではなく、アイヌ人、ギリヤーク（ニブヒ）人、オロチョン（ウィルタ）人、小笠原白人などからなっている」と云う言説があります。

今から1500年前・5世紀頃、サハリンから北海道に南下し、7・8世紀に隆盛期を迎えたとされる、クジラ・アザラシ・オットセイなど海獣狩猟を主たる生業としていたオホーツク文化が最近にわかに注目を浴びています。

いまに生きる、私の遺伝子のなかに、当時のオホーツク文化が少しその設計図に刷り込まれているのではなかと悠久の時を超えて、連綿と続くその命の時空に思いを馳せています。

## I、サハリン（樺太）のオホーツク文化

オホーツク文化の遺跡分布で知られている地域は、南サハリンと北海道の北部から東部にかけての地域、それに千島列島です、つまりオホーツク海南部を取り囲む地域なのです。上記のように、オホーツク文化と言う名称は、よくその地域的特性を表しています。

1) サハリン（樺太）で知られているオホーツク文化の遺跡は100ヶ所ちかくありますが、主なものは次の通りです。

- ①鈴谷遺跡
- ②アジョールスク遺跡
- ③スタロドゥブスコエ遺跡
- ④東タライカ遺跡
- ⑤ネベリスク遺跡
- ナイブチ遺跡
- 上三ノ沢遺跡

## 2) サハリン（樺太）におけるオホーツク文化の起源

A) オホーツク文化の成り立ちの要素は①鈴谷遺跡・②アジョールスク遺跡などの

- ①骨角器からたどると、オホーツク海北岸の古コリャーク文化に、類似している。
- ②一方、石器からみると、アムール川の下流域に類例をたどることができ、また縄文文化の伝統も認められる
- ③土器についても同様に、アムール川下流域の新石器時代文化とプロト縄文および縄文文化、その両方に類似点がある

B) サハリンにおけるオホーツク文化に先行する文化を考える

サハリン北部のトゥイミ川の支流のイムチン川流域のノグリキ村から3キロの所に、イムチン第二遺跡があります。

ここで平底で、無文や櫛目文の土器が見つかっています。この土器はアムールのスウチュ島の遺跡、テバフ遺跡、ニコライエフスク市郊外にある遺跡に類例が求められる。

同時に櫛目文土器の伝統は、スタロドゥブスコエや鈴谷式土器の一部にも見られます。

- ④プロト縄文文化の担い手の伝統、言い換えれば、先アイヌ・パレオアイヌ的波は、おそらく、プロト縄文期に、南サハリンに入ってきたものと考える。こうした波は、南サハリンだけでなく、サハリン北部からアムール河下流域にまで達している。アムール河下流域の要素と、パレオアイヌ的＝プロト縄文な要素とが前もってサハリンにあったと考える
- ⑤そしてそのうえに、オホーツク海北岸のコリヤーク文化が重合してオホーツク文化が誕生したと考える

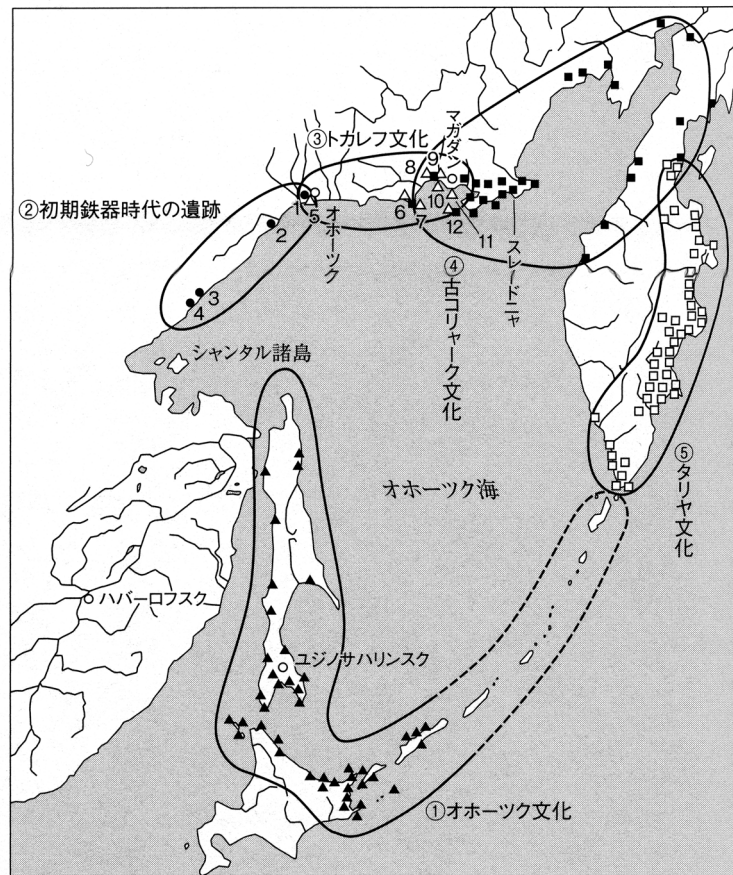


図18 オホーツク海沿岸の古代文化の遺跡分布図

1. クフトゥイⅦ・Ⅷ 2. ナグダン 3. アヤン 4. ウイカ 5. クフトゥイⅠ～Ⅳ 6. トカレフ 7. スパーファリエフ 8. オクサⅠ 9. ペリョーゾヴァヤ 10. シュコーリナヤ 11. オリスカヤ 12. ナホトカ

出所：オホーツクの古代史 菊地俊彦 著 平凡社新書491 平凡社 発行

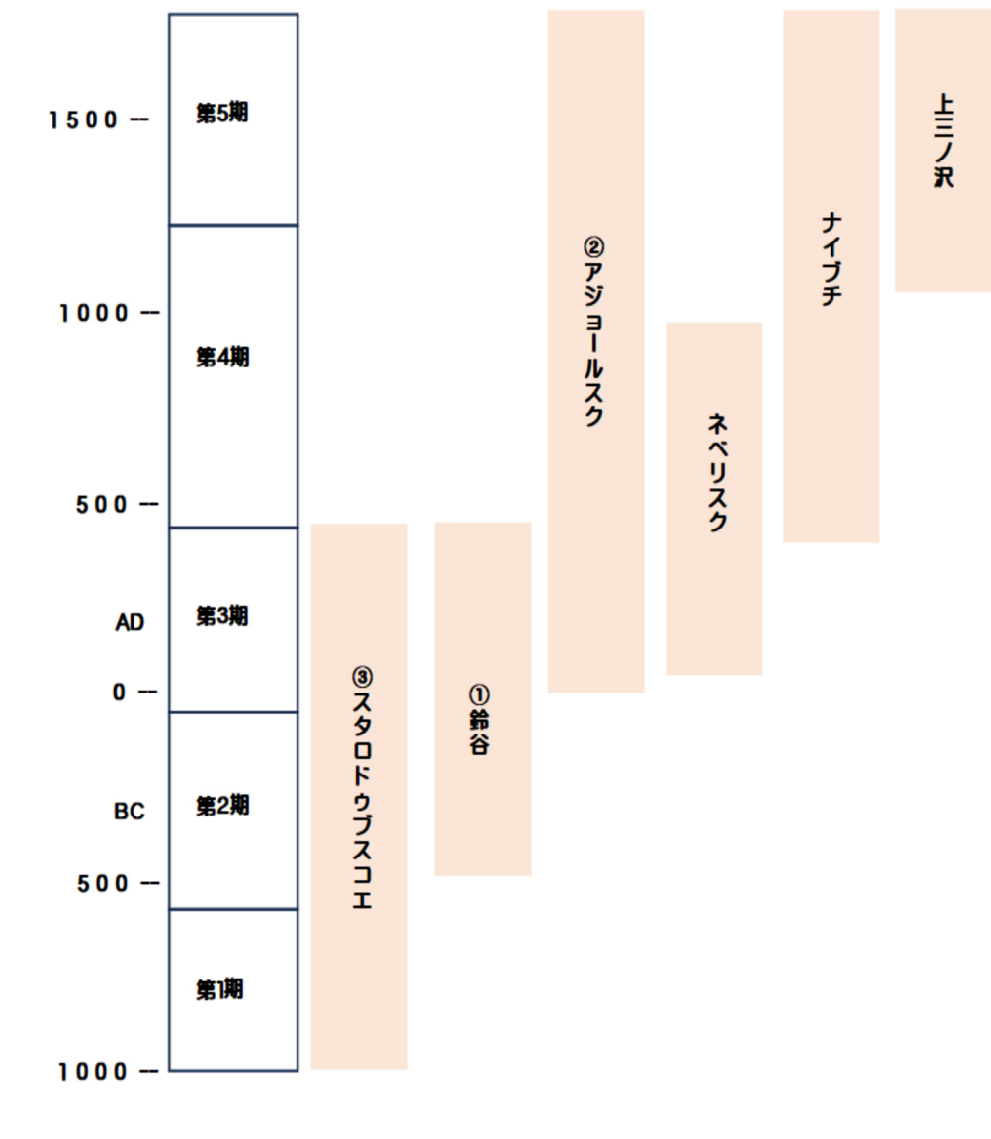


図11A サハリンにおけるオホーツク文化の時代区分 出所：「オホーツク文化の諸問題 大井晴男 編 学生社 発行」の図11を参考に当方が作成

## Ⅱ、オホーツク海沿岸のオホーツク文化

### 1) 主な遺跡 西岸から東に

- ⑥香深井遺跡（礼文島）
- ⑦オンコロマイ貝塚（稚内）
- ⑧目梨泊遺跡・北尻北チャン（枝幸）
- ⑨オムサ口遺跡（紋別）
- ⑩栄浦第二遺跡・トコロチャシ遺跡（常呂）
- ⑪モヨロ貝塚（網走）
- ⑫斜里朱円提墓群・朱円竪穴寿居群・ウナベツチャシ跡（斜里）
- ⑬トビニタイ遺跡（羅臼）

●サハリン（樺太）のオホーツク文化と類似しており、同じ文化圏と考える

### Ⅲ、オホーツク文化と<sup>まつかつ</sup>靺鞨文化

#### 1) 靺鞨文化

紀元 7・8～10・11世紀にかけて、アムール河中流域（トロイツコエ遺跡・ナイフェルト遺跡）・下流域、その上流域で栄えた広範囲な文化。

文化を支えた民族はツングース系で、アムール川流域やサハリンに住む南東ツングース、北に分布する北方ツングース、南西に分布する南西ツングース（満洲族、シベ族）などです。

生業は農耕が主で、遺跡からコーリャンやキビの種子が発見され、住居址からブタの骨が出土しており、ブタが飼育されていた。墓から馬の骨が出土し、<sup>あぶみ</sup>鍙、<sup>くつわ</sup>轡、<sup>むながい</sup>胸懸、<sup>しりがい</sup>尻繫の金具が見つかった。

労働用具ですが、製鉄技術の発達で、自らの鉄器、鉄製品の製作と供給が可能であった。また鉄<sup>てつやじり</sup>鋸が大量に出土している。

4・5世紀の土器は花瓶型で、7・8の土器の多くは鉢型で、ほかに<sup>かめがた</sup>甕形や<sup>つぼがた</sup>壺型などもある。

矩形の青銅製飾り金具、鉄<sup>てつほこ</sup>銚、鈴、鐸、また軟玉製耳環・管玉なども出土しており、高度な文化があったと考えられる。

#### 2) 靺鞨文化はオホーツク文化とどんな関わりがあったのか

常呂栄浦第二遺跡から矩形の青銅製飾り金具、鉄<sup>てつほこ</sup>銚、鈴、鐸、また軟玉製耳環・管玉なども出土し、靺鞨の遺跡に類似している。

だが、生業・労働用具・埋葬の風習などをオホーツク文化と靺鞨を比較すると、全く違った文化形態が見えてくる。

大陸からの渡來說などがあるが、オホーツク文化の人たちが大陸の靺鞨文化圏との交流や交易を通じて入手したものであろうと考える。だから、矩形の青銅製飾り金具、鉄<sup>てつほこ</sup>銚、鈴、鐸、また軟玉製耳環・管玉など極めて限られた種類の品目にとどまっているのである。

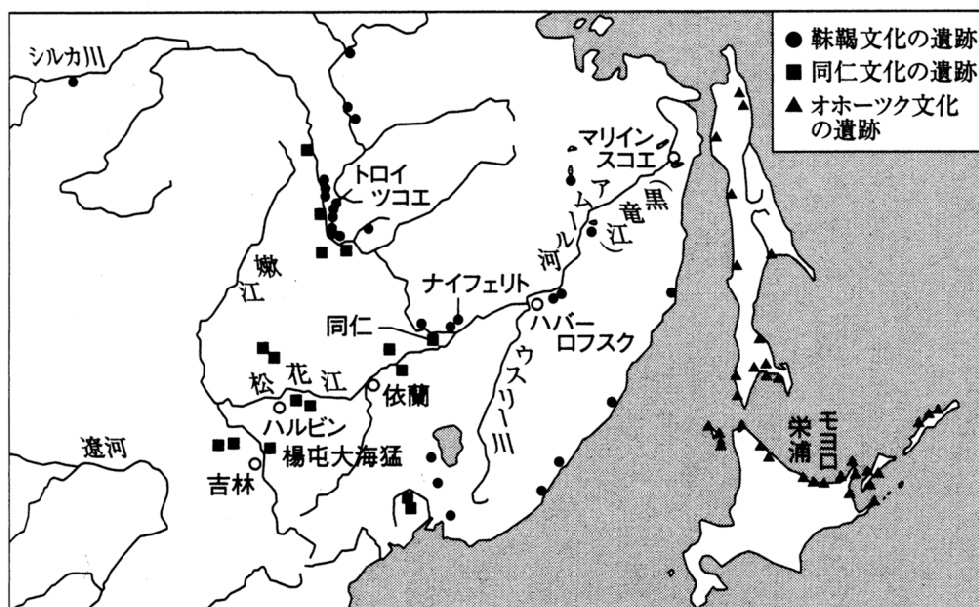
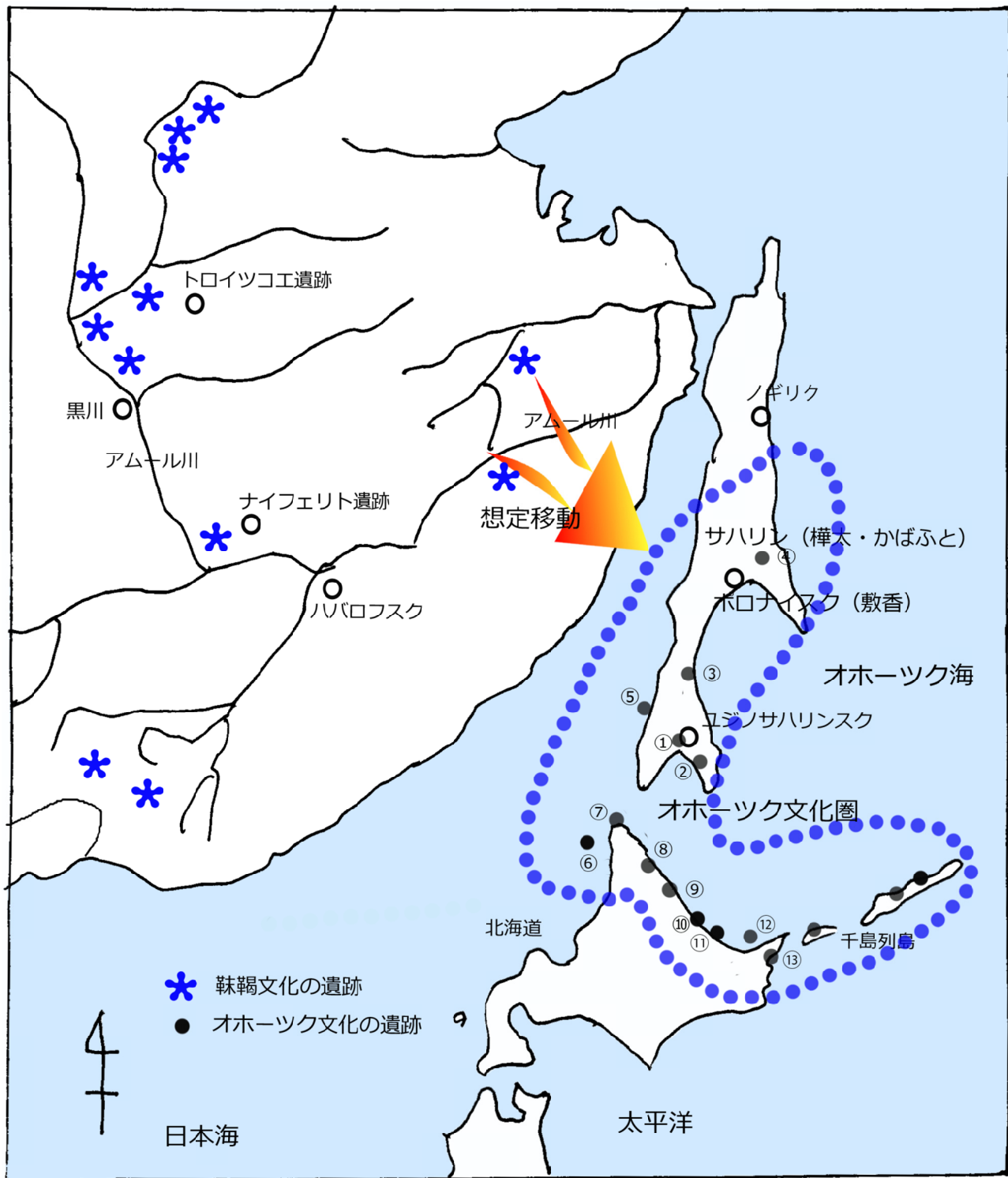


図14 靺鞨文化、同仁文化、オホーツク文化の主要な遺跡分布図

出所：オホーツクの古代史 菊地俊彦 著 平凡社新書491 平凡社 発行



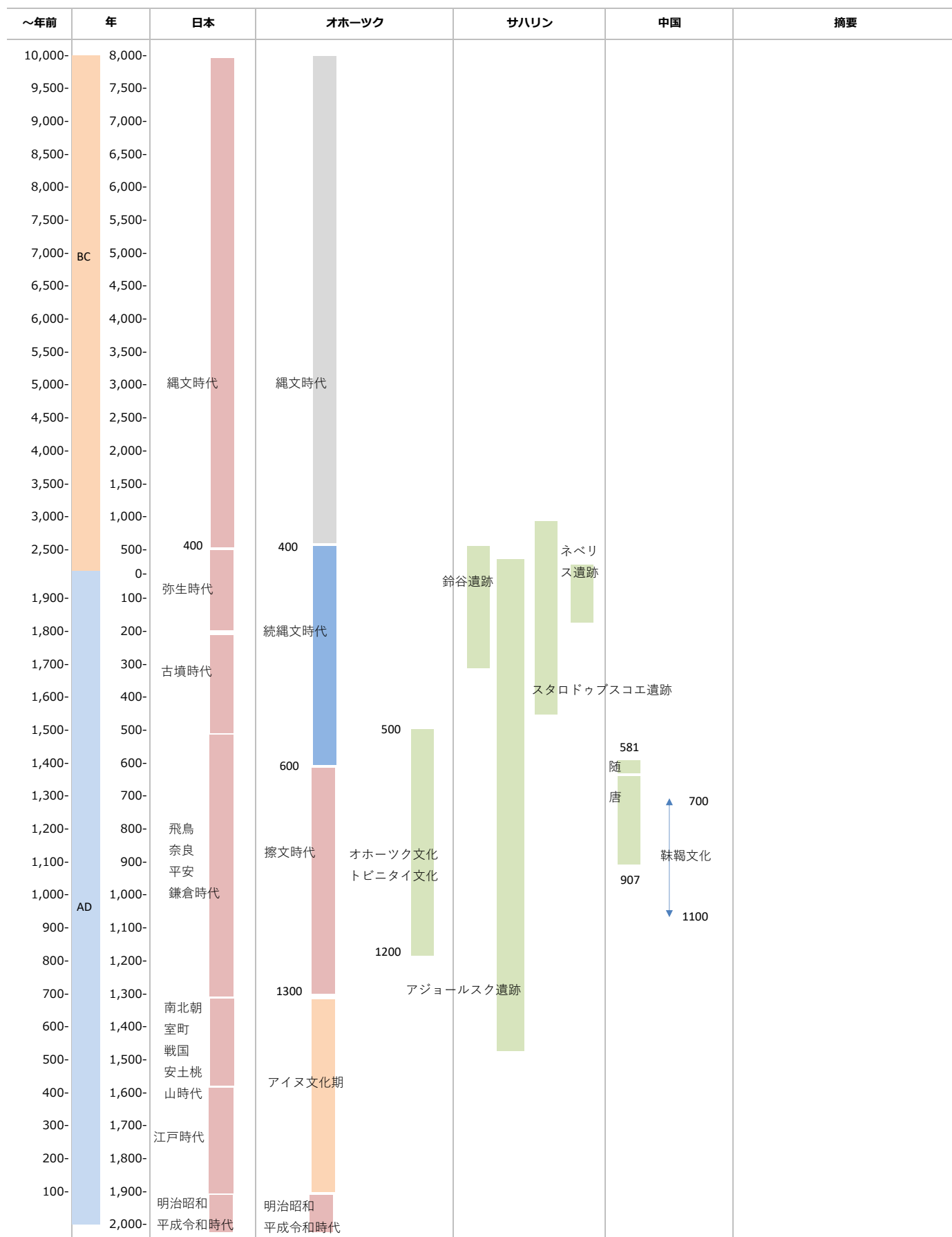


図1 オホーツク文化 年表 出所：諸資料を参照して、当方が作成

## あとがき

常呂遺跡を組み込んだアドベンチャートラベルプロモーションの初動に取り組んでいます。常呂遺跡は縄文・擦文・オホーツク・アイヌなどのそれぞれの文化が重なっています。今回、常呂遺跡におけるオホーツク文化とは、どのようなことなのかを学習することになりました。そのまとめが本レポートです。

内容については、考古学や博物学のご専門の方から見れば、拙く不備な点が多数有ろうかと思えます。ご感想・ご意見・ご指摘などを戴ければ有り難いです。受け入れる心の準備はできています。さらに学習を深める所存でございます。宜しく、お願いいたします。最後まで、目を通して戴き、有難うございます。

令和7年5月  
逢坂信治

## 参照した文献

オホーツク街道 街道をゆく38 司馬良太郎 著 朝日新聞出版 発行

オホーツクの古代文化 東北アジア世界と北海道・史跡常呂遺跡 東京大学  
文学部常呂実習施設/考古学研究室 編 新泉社 発行

日本の遺跡13 常呂遺跡群 先史オホーツク沿岸の大遺跡群 武田修 著 同成社 発行

シリーズ「遺跡を学ぶ」001 北辺の海の民 モヨロ貝塚 米村衛 著 新泉社 発行

オホーツクの古代史 菊地俊彦 著 平凡社新書491 平凡社 発行

シンポジウム オホーツク文化の諸問題 その起源・展開・社会・変容  
大井晴男 編 学生社 発行

北海道の先史文化 大場利夫 著 みやま書房 発行

えさし博物誌 オホーツクミュージアムえさし 編 枝幸町教育委員会 発行

---

史跡 常呂遺跡

1500年の時空を超た古代オホーツク文化を探る

発行日 平成7年6月18日

著者 逢坂信治

発行所 アイティデザイン研究所

---